

論文

連合軍による空爆戦とドイツの戦時社会 1939-1945年

—連邦共和国における想起の文化の変遷と歴史記述の傾向

ヨルク・エヒターンカンフ

(猪狩弘美 訳)

ここ数十年の間に、ドイツ人が第二次世界大戦について想起した場合、ほとんどの人々がまず思い浮かべたのは、サイレンの轟く音や防空壕で過ごした夜、廃墟での生活だった。それも不思議ではない。というのも、ドイツのとりわけ一般市民にとって、「空爆戦」は「第三帝国」の日常生活を特徴づけるものだったからだ。ナチズムのプロパガンダは、戦時の日常における苦難や死を、前線での戦闘と言葉の上で同レベルに置くために、「銃後」について語った。それによって戦いの共同体としての「民族共同体」を呼びさましたのである。この暴力の経験は、1939年9月にドイツ帝国によって始められていた、ナチズムの征服・絶滅戦争が、自身の領土へ逆襲さながらに戻ってきた頃には遅くとも、想起を規定するような経験となった。¹

たしかに第一次世界大戦中にすでに、より小型の個々の爆弾が投下されてはいた。しかし第二次世界大戦ではじめて、爆撃隊が辺り一面を攻撃し、炎の嵐で町の中心全体を完全に破壊することを意図して、産業施設や大都市を「絨毯爆撃」で覆ったのだった。70万を超える連合軍の爆撃機がドイツに出撃し、約160万トンの爆弾が投下された。連合軍自身の損失は、15,600機と約10万人の乗組員だった（ドイツ側は防衛で57,000機を失った）。² 航空戦では、産業化された戦争がもつ、矛盾をはらむ現代性が、地上戦（戦車）におけるよりもさらに色濃く表れた。航空戦のために、すべての資源、すなわち経済的、技術的、および科学的な資源が動員された。「銃後」に関して言えば、航空戦は、莫大な組織力の投入（防空）、日常生活の統制、19世紀の社会ではほとんど考えられなかったような住民の規律を要求するものだった。

今日でもまだ、とりわけ都市部が激しい爆撃を受けたことを示す破壊の痕跡や、戦闘の規模を感じさせる防空の遺物が存在する。時には、突如として戦争の痕跡に出くわすこともある。たとえば、ベルリンやハンブルクなどには地上防空壕、ウィーンなどにはかつての高射砲台が残っている。都会の真ん中の大型駐車場をよく観察すると、そこが

空襲に遭う以前は住宅街だったことに気づく場合もある。建設作業員が、信管が装着されたままの不発弾を見つけることもある。ポツダムではこういったことが定期的に起こるのだ。

したがって、戦争終結から70年経っても「爆撃テロ」の記憶が、特にドイツで生々しいのは不思議ではない。空爆戦は、社会を戦争社会に変える要因ただだけでなく、数多くの戦後の「伝説」の基盤ともなった。それに関する公の記憶は——それが本稿のテーマなのだが——、まさに最近いくつかの論争を巻き起こした。歴史的出来事から時が隔たれば、それについての関心が低くなるのではなく、むしろその逆なのだ。爆撃戦のイメージは、世界大戦の記憶の変遷とともに変化する。それゆえ、私は次の論拠について考えたい。すなわち、この特殊な暴力の経験についての集合的記憶は、異なる時間間隔とともに展開した、戦争に関するさまざまな記憶の変遷の、表現と結果だということである。

はじめに、いくつかの「伝説」に反して1950、60年代にも航空戦への言及があったことについて述べたい。次に、21世紀になって以降にこのテーマを特徴づけている、質的、量的変化について扱う。最後に、私はこの問題の三つの基本的な特徴を要約したい。その際には、歴史研究における航空戦の受容に目が向けられる。要するに、歴史家が過去の専門家として、文化的記憶に影響を与えたのだ。補足として、最新の研究の試みとその問題点や不足部分についても考察したい。

I. 航空戦と戦後

数年前に航空戦が大きく扱われた時、著者や出版社はそれまでの「タブー」を破ったという印象を与えた。タブー破りの新刊は売れるものだ。これについてはすぐにまた取り上げることにする。それ以来、研究によって示されたのは、戦後の東西ドイツ国家での想起の風景には、誰も踏み

込んだことのない領域はないということだ。³ 1945年以降、多数の出版物（回想録、地方史、小説）が、空爆をテーマとした。たとえ多くの場合、個々人の記憶や描写的な記述が軍事史的分析を背景に押しやったとしても、情報は十分にあったのだ。⁴

冷戦下の東ドイツでは、とりわけ1945年2月13日、14日のドレスデン爆撃が、西側の侵略的「帝国主義」の政治的象徴として用いられた。⁵ 共産主義政権は、それ自体としては平和を愛する国家の一つとしての東ドイツの自己正当化に、爆撃に対する恐怖を利用した。西ドイツの集合的記憶において爆撃は、国のレベルでは、市町村と比較して取り上げられることが少なかった。毎年の記念行事では、町の有力者や教会の代表者が重要な役割を果たし、その町で犠牲となった人々や、戦後の物質的あるいは精神的な復興が想起された。爆撃の記憶は常に、「過去の克服」の過程において、ナチズムの恐怖支配の拒絶と関連していた。軍国主義と宗教的な天皇崇拝を放棄したものの、政権自体の拒絶はしなかった日本とは異なり、ナチの犯罪的独裁とは公に一線を画した西ドイツの（東ドイツでもそうであったが）立場には、人的な連続性はあったものの、疑問の余地はなかった。⁶

空襲の被害が特に酷かった個々の都市は、次第に、無意味な恐怖、無辜の犠牲者、復興に向けた努力といったものの象徴となっていった。そういった都市には、ドイツではドレスデン、ハンブルク、さらにはヴェルツブルク、プフォルツハイム、カッセルがある。似たことが逆の意味であてはまるのは、ポーランドのワルシャワ、オランダのロッテルダム、イギリスのコヴェントリーである。そしてとりわけ東京、広島、長崎にも同様のことが言える。空襲のメッセージは、しばしば死者の数において重みを増す。死者の数は推定上の歴史的事実とみなされ、恐怖を表すのだ。

想起の歴史に関する最近の事例研究は、戦後の語りの内容と意味を分析している。その中心にあるのは都市住民の粘り強さと抵抗力で、そこでは住民は、自身をまずは外部からの暴力の犠牲者と認識し、ナチ・ドイツによる都市へのテロ攻撃は後景に退いていた。これらの研究が示すのは、誰が想起政策の立役者だったのか、そしてそれらにはどういった目的があったのかということである。その目的とはすなわち、地方を戦争社会に作り変えるための統合と動員である。この機能分析の手法には、当時のメカニズムと戦後のこれらの語りの課題が明らかになるという利点があった。むしろそれには、多くの場合、歴史的出来事そのものに光が当たらないという欠点があった。言わば、爆撃のない爆撃の歴史である。実際には、記憶の場、すなわちジェイ・ウィンターの言う sites of memory は、哀悼の場もあり、そこでは過去が現在化された。そういった過去の

現在化が行われたのは、原則的にヨルク・アーノルトが言うような形式⁷、すなわち1960年代に至るまでは戦後初期の伝統を引き継ぐ、言語上のあるいは別の象徴的な形式においてである。それゆえこの形式は、1945年以降に伝統が断絶したというテーゼ（ジェイ・ウィンターが代表的である⁸）を相対化する。航空戦の記憶は、地方エリートの政治的関心を集めただけでなく、都市の住民の大部分が体験した過去でもあった。

とりわけ1950、60年代の地方での想起に見られた航空戦に関する表現は、戦争の記憶を特徴づけた一般的な犠牲者言説とも一致するものだった。日本人もそうであったように、ドイツ人は自らを戦争の犠牲者と見ていた。⁹ ドイツにはたしかに原子爆弾は投下されなかったが、絨毯爆撃、高度の物質的破壊、住民の追放による被害が、ドイツ人による犠牲者ではなく、犠牲者としてのドイツ人を中心に置くという公的認識につながったのである。この被害者レトリックは、戦時中に由来する。ナチのプロパガンダは、犠牲者に意味を与え、個人の死を民族の不死性を保証するものとして解釈し直していたのだ。1945年以降のドイツ人は、戦争中に自身が体験した出来事を、まずは歴史解釈の中心に置き、そこには受動的に被った戦争暴力の総体としての航空戦があった。いくつかの廃墟が惨状を伝えるものとして保存され、平和のために警告を促した。その最も有名な例は、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム記念教会である。それに対して、ナチの恐怖政治の犠牲者とその暴力は、不在であり続けた。¹⁰

この傾向が変化したのは、1970、80年代になって、ヨーロッパ・ユダヤ人の大量殺戮が、1939年から45年の記憶の前面に置かれるようになってからである。それ以降、戦争遂行とホロコーストは、表裏一体の関係を形成している。「感じ取られた犠牲者（感情面で犠牲者となった人々）」は自身を加害者から外すことになるため、ナチズムの犠牲者に集中することは、同時に過去の克服を制限するのではないか、という議論はむしろ別の問題である。¹¹ 我々の問いに関しては、「爆撃」というテーマが、このような背景のもとで21世紀になる前後に経験した、急速な展開が興味深い。これについて次の章で論じよう。

II. 新たな爆撃戦ブーム？

ジャーナリストで歴史家のヨルク・フリードリヒが、イギリス空軍によるドイツの都市爆撃に関する著書を2002年に出版した時、専門家の枠組みを大幅に超えた、激しい感情的な議論が起こった。¹² この議論の原因は、一つには、表向き新しいテーマである『炎上』（本のタイトル）が、タブーを破ったためだった。もう一つは、爆撃戦を読者の目の前に突きつけるという問題のあるやり方のためだっ

た。

批判はどのようなものだったのか。第一に、フリードリヒは、この歴史的出来事を適切な文脈に位置づける代わりに、その考察をドイツ人の視点に限定したことが挙げられる。ヒトラーの総力戦布告、ゲーリングの空軍によるイギリス爆撃、ワルシャワ市の中心部やロッテルダムの住宅街の爆撃は扱われなかった。ハンス・ウルリヒ・ヴェーラーが批判したように¹³、総力戦で攻撃された側があらゆる手段で逆襲したという事実は、イギリスによる空爆を免責するものではないが、全体の関連を考慮に入れることによって、バランスの取れた見方が可能となるのだ。

第二に、フリードリヒは、あたかもチャーチルとヒトラー、イギリスによる都市爆撃とホロコーストが同列にあるかのような印象を与えた。爆撃の効果を説明するために、彼は、ドイツ人にとっては非常にはっきりとホロコーストを示唆するような言い回しを使った。すなわち、戦略爆撃は「絶滅戦争」になり、防空壕には、人間が「ガス殺」され「焼却炉」で焼かれた「クレマトリウム」という語が用いられている。次の引用がそのスタイルを明確に示している。「火の海から身体を避難させるための地下室は不可欠だった。なぜなら、そういった身体が十分にあったからだ。[……] 戦争は長期化し、ほとんどのドイツ人には自分たちの地下室よりもましな防護はなかった。なじみの天井が、炎の攻撃の中で思いがけず敵に変化した。備蓄石炭を運び出すようにという絶え間ない呼びかけに従った人々も、一部にはいたが、どこに運べばいいのかという疑問をもつ人もいた。人々は、ブリケットがガスで満たされるとは思わなかったのだ。[……] 地下室は[最初]冷えた炉だ。暖房用燃料のように、燃えている塊が、彼らが保管していた地下の岩石に灼熱を伝えたのだ」¹⁴

2003年にフリードリヒは、空爆犠牲者の強烈な写真が掲載された写真集をも出版し、説明のキャプションが全く不十分だったためになおさら、読者に衝撃を与えた。¹⁵ 破壊された建物や身元が判らないほどに焼け焦げた遺体、こういった写真は『炎上』の政治的メッセージと合致するもので、批評家らはフリードリヒの修正主義と人間の尊厳を侵す行為を非難した。あるいはフリードリヒは、思い切った激烈な写真に語らせることによって、航空戦を「経験可能な」ものにして、批評したかったのだろうか。本の最後に掲載された出版社の説明は、写真から距離を取っており、これほど内部の矛盾を強調するものはない。出版社は一切の責任を負いたくなかったが、利益は得たかったのだろう。

航空戦の研究はそれ以前にも行われていたものの、それは「上から」の軍事技術的な観点からのものだった。ホルスト・ボークは、特にドイツ歴史学の基本文献『ドイツ帝国と第二次世界大戦』の中で、航空戦遂行について広範に

扱った。¹⁶ この関連において、ドレスデン空襲を道徳的に非難されるべきものとして、また最終的に無意味な軍事行動として描いた、ドイツ以外の歴史家の著作が、ドイツで好んで受容された。¹⁷ フリードリヒの著書、あるいは彼が起こした議論と言った方がいいだろうが、それが次のことに関するさらなる探究の最初のきっかけとなった。第一に航空戦の歴史、第二に航空戦の記憶、すなわちフランスの歴史家ピエール・ノラの表現を使えば「第二段階の歴史」である。¹⁸

そのようにして、ドイツ再統一後に「ドレスデンのケース」の詳細な学問的検討が可能となった。ドレスデン市は2004年に、とりわけ1945年2月13、14日の空襲の正確な犠牲者数を明らかにするための、学際委員会を設置した。死者35,000人という以前の推定値は、十倍以上に膨れ上がった。極右勢力は「爆撃ホロコースト」について語った。実際の犠牲者数は最大25,000人で、明らかにもっと少なかった。そして、他にも修正されたことがある。新聞は長い間、低空の連合軍の飛行機が、燃えさかる市の中心部から逃れようとした人々を狙ったと報じていた。しかし、連合軍のそういった出撃命令の証拠は見つからなかった。委員会の仕事は、ドレスデン以外でもメディアの大きな関心を集めた。¹⁹

他の焦点は、おそらく公の場での効果はより少ないが、航空戦についての我々のイメージを中期的に特徴づけるものである。ナチ政権は、爆撃とその結果にどう反応したのか。これは、たとえば2006年のミュンヘン現代史研究所のワークショップ²⁰で提起された研究課題の一つである。そこでは民間防空の歴史について論じられた。防空組織がますます細分化したことは、ヒトラー政権の多頭支配の一つの結果と理解できる。地域・自治体レベルで見ると、地方政府が、いかに自ら主導して爆撃の結果と戦ったかが分かる。アーミン・ノルツェンは、ナチ国民福祉団(NSV)のような党組織が、1943年以降の激しい空爆下では機能しなかっただろうと強調する。「連合国の空爆がなかったら、ナチ政権は内部で強固な支持を享受し、あと何年か続いていただろう」と彼は論じた。²¹

もう一つの重要な問いは、爆撃が社会にどういった影響を与えたかである。「民族同胞の女性たち」は、すでに早い時期から民間防空で主要な役割を担った。その意味で、民間防空はナチ時代の民族共同体における女性の動員に役に立った。²² また、防空に伴って「戦死した」女性が、「戦死した」兵士と同列に置かれたことも象徴的だった。私刑も関心を集め、連合軍パイロットに対する約350の私刑殺人が取り上げられている。もっとも彼らを殺害したのは主にナチの役職者で、「民の裁き」の犠牲となったのはごく稀だった。²³ 航空戦というテーマがナチズム研究の文脈にどう埋め込まれたかを示唆するためには、ナチ支配の歴

史、性の歴史、暴力の歴史といったキーワードで、ここでは十分だろう。

さらなる重点は「第二段階の歴史」、すなわち航空戦の記憶の歴史に置かれている。ここには、現在に向けて弧が描かれている。いくつかの「伝説」および解釈や議論の型がいかに強い生命力をもつかを、壊滅的爆撃の標的となったドイツ第二の都市ハンブルクの例は示した。マルテ・ティーセンは、都市における想起の文化の展開を三つの段階に分けている。²⁴ 第一に「追悼の確立1945年～1955年」、第二に「定められた型の中での想起1956年～1979年」、第三に1995年まで続いた「想起のブーム」である。西ドイツにおける1980年以降の平和運動の興隆によっても、1943年の破壊と1945年の終戦に関する対照的な記念行事の並置は続いたが、より大きな歴史的な文脈も作り出された。航空戦と「解放」としての終戦は、同価値をもつ集合的な記憶の場となった。1993年によく、ヘニング・フォン・シュラウ市長（社会民主党）が、「ドイツ国内の平和が極右勢力によって脅かされている時代において、ハンブルクでも7月25日から8月3日までの出来事が孤立した突然の自然現象ではないことを想起しなければならない」と指摘した。²⁵ 21世紀初頭には、ハンブルクの公的記憶は、爆撃と追放の犠牲者に関する感情的な議論によって特徴づけられていた。想起の文化の変遷には、結局のところ世代間の断絶が役割を果たしている。このこともハンブルクの例は示している。もし、自身の経験に即して想起できる人間がもはや存在しなければ（ドイツのメディアは好んで「時代の証人」について語る）、すなわち、もはや歴史の証人が存在しない場合には、あるいは客観的で多種多様な考察が、より容易になるかもしれない。何の感情も関わらない場合には、ハンブルク爆撃のような恐ろしい出来事も歴史化される。つまり、ナチの都市史の歴史の文脈の中に統合されるのだ。ハンブルクにおけるこの展開は、私がいま概略を述べたような、西ドイツにおける1939年から1945年の一般的な想起の傾向の変遷を反映している。航空戦研究は、この想起の歴史における変化の結果であると同時に推進力でもある。

航空戦との新たな取り組み方がはっきりと見られるのは、結局、復興の象徴的な実践においてである。それに関しては、ドレスデンとポツダムという二つの例が際立つ。ドレスデンでは、東西ドイツ統一の少し後の1994年に、1945年に破壊されたフラウエン教会再建のための礎石が置かれた。破壊から60年後の2005年、ドレスデン市は、東ドイツ時代にはその廃墟が警告の記念碑として機能していた教会の落成を祝った。この再建は市民運動の取り組みの表れだった。1億8000万ユーロのコストの大部分は、寄付によって賄われた。

それに対して評価が定まらないのは、かつての^{えいじま}衛戍教会

の建物を再建するという、ポツダムのプロジェクトである。²⁶ 衛戍教会は、1945年のイギリスの空襲で激しく損傷し、1968年に社会主義政権によって爆破された。再建に対して異論がある理由は、この教会が、ドイツ人の集合的記憶において1933年の「ポツダムの日」と結びついているためである。この教会で、ヒンデンブルク大統領と新首相アドルフ・ヒトラーが握手をかわしたのだった。国民保守的なエリートが、かつてのプロイセンとの結びつきによってナチズムを「上流社会に通用」させたという、今日まで続くイメージである。第三帝国のそのような象徴を再建することを、反対者は激しく拒否しているのだ。これも、想起の歴史の文脈における市民社会の取り組みの表れの一つである。

ドレスデンとポツダムの両方の場合において、再建の支持者は、その根拠は和解の機能にあるとしている。フラウエン教会と衛戍教会は、どちらもイギリスの爆撃で破壊され、以後はかつての敵国が和解したことの不動の証とされる。ポツダムの衛戍教会は、時代遅れの人々のための巡礼地ではなく、その反対に「和解の中心地」にならなければならないのだ。両方のケースで、さらに同じ象徴によって、この独英の和解が示されているのも不思議ではない。すなわち、コヴェントリーの釘の十字架のことである。（イギリスの都市のこの教会は、1940年11月14、15日のドイツの爆撃によって焼失した。廃墟内に三つの大きな釘が見つかり、それが後に十字架の形に組み合わせられた。宗教的解釈によれば、破壊からキリスト教の希望の兆しが生じたのだ。）

和解の印における独英間の象徴的な結びつきは、結局、航空戦に関する研究や記憶における欠落を示しており、それについては最後に指摘したい。そこでは、歴史学の新たな取り組みだけでなく、ヨーロッパ規模の、さらに大西洋の向こう側の第二次世界大戦に関する記憶を把握する傾向も関連してくる。

このように、ここでも国民史的な視点を克服することが、展望を開くように思える。それは、航空戦のグローバルな歴史でなくともよい。付加価値を約束するのは、比較研究、あるいは歴史の絡み合いを考慮した研究である。それらの試みは、航空戦の歴史だけでなく、その想起の歴史にも適用することができる。このようにして、ドイツのある都市で広島への原爆投下が記憶されたか、あるいはどう記憶されたかといったことが問われうる。少なくないドイツの都市で、通りや広場に広島の名がつけられている。たとえば、ギーゼン、ゲッティンゲン、ニュルンベルク、そしてとりわけベルリンである。ベルリンの日本大使館はヒロシマ通りにある。名づけの根拠としては、連帯の思想が強調されるだけでなく、条件法での歴史的つながりも指摘される。すなわち、日本の港町の代わりにドイツの首都に

原爆が投下されていたかもしれないという可能性である。ポツダムでは、2007年にヒロシマ広場への追悼施設の設立と運営、ならびに「広島、長崎への原爆投下の犠牲者追悼の保護」のための協会が設立された。寄付によって運営されている「ポツダム・ヒロシマ広場をつくる会」は、市長の後援の下にあり、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー元連邦大統領の「精神的支援」を受けた。後援者には、ベルリンとポツダムの独日協会、広島市と長崎市、社会民主党と同盟90/緑の党の地方組織、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）がある。²⁷ 戦後60年の2005年にはすでに、緑の党とIPPNWの代表が、その広場を「象徴的に」ヒロシマ広場と名付けた。²⁸ 2011年末には、ヒロシマ・ナガサキ広場と改名された。福島原発事故の後、協会は、原爆の犠牲者を、原子力の平和利用の放射線被害者である「ヒバクシャ」との関連の中に置いた。原爆投下の追悼の場が、核廃絶を訴えるためだけではなく、原子力エネルギーの平和的利用と軍事的利用を「同一のコインの両面」とみなすことに使われたのだ。この結びつきは、日本では数十年にわたって自明ではなかった。日本における1945年の空爆戦に関する公的な記憶は、「原子力は爆弾の取引である」という政治的表現のうちに芽生え、その皮肉ははるか遠くまで届いたのだ。²⁹

もう一つの例として、先ほどのドレスデンとコヴェントリーのケースがある。³⁰ 両都市の協力関係はすでに1956年に始まった。シュテファン・ゲーベルが「コヴェントリーとドレスデン：国境を越えた想起のネットワーク」に示すように、この年に平和主義のイギリスの労働者らが「コヴェントリー・ドレスデン友好協会」を設立し、その理念が社会主義統一党の賛同を得たのだった。比較の観点から次のことが問われうる。すなわち、ドイツとヨーロッパの諸都市は、爆撃のXデーをどう記憶しているのか。冷戦と平和運動は、航空戦との関わり方にどのような効果を現したのだろうか。冷戦終結は、どんな意味をもったのか。³¹ 知覚史の意味においては、それぞれの国で破壊がどう受容されたかが問われうるだろう。このような国民史とは異なる視点においても、より根本的な問いが追究されうる。つまり、かつての支配的な語りがその効力を失った場合、具体的な破壊の場は、現代社会の歴史・政治的な自己理解のために、どのような意味をもつのかという問いである。³²

Ⅲ. 新たな視点

私は本稿のはじめで、西ドイツにおける想起の文化に、いかに「爆撃」を位置づけることができるか、そしてこのテーマが歴史研究においてどのような役割を果たしてきたかという問いを投げかけた。次の三つの考察が、結論になりうるだろう。第一に、爆撃戦への新たな関心は、(西)

ドイツの想起の文化の中における、広範囲に及ぶ変化の一部である。1945年から60年の間には自国の苦難の歴史に焦点が当てられ、1980、90年代には「犠牲者との同一視」が見られたが、その後で新たな展望が開けた。第二に、たとえ公の場でこれと反対のことが好んで主張されているとしても、歴史家は航空戦、その社会的結末と記憶を忘れてはいなかった。爆撃は、とくに第二次世界大戦中の知られざる出来事ではなくなっている。正しいのは、研究の及んでいない部分があるということだ。歴史学の分野での、最近の文化史的な、国家の枠組みを越えた取り組みが、ここで新たな研究分野の輪郭を描いている。

航空戦の過去は、ようやく「道徳から解き放たれ」うる。これが第三の結論である。冷戦終結と世代交代を経て、以前よりも、航空戦の歴史を書いたり、それを罪の問題や相殺の試みとは切り離された公の記憶において保ち続けたりする機会に恵まれるようになったのだ。そこにはまさに、航空戦史の今後の「ヨーロッパ化」のための前提条件が存在するのである。

¹ 本稿は、日独共同大学院プログラム「市民社会の形態変容、日独比較の観点から」秋季セミナー（2014年9月29日～10月4日、東京大学）で行った講演に加筆・修正したものである。Ralf Blank, *Kriegsalltag und Luftkrieg an der "Heimatfront"*, in: *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg*, Bd. 9: *Die deutsche Kriegsgesellschaft 1939 bis 1945*, Teilbd. 1: *Politisierung – Vernichtung – Überleben*. Hg. im Auftrag des Militärgeschichtlichen Forschungsamtes von Jörg Echternkamp, München 2004, S. 357-461; 比較の観点からの文献は: Dietmar Süß (Hg.), *Tod aus der Luft. Kriegsgesellschaft und Luftkrieg in Deutschland und England*, München 2011. 航空戦に関する基本的な軍事・社会史が、東西ドイツ統一の時期に(東)ベルリンの歴史家によって書かれている。Olaf Groehler, *Bombenkrieg gegen Deutschland*, Berlin 1990.

² Richard Overy, *The Bombing War: Europe 1939-1945*, 2013 (dt. Der Bombenkrieg: Europa 1939 bis 1945, Berlin 2014).

³ Volker Hage, *Zeugen der Zerstörung. Die Literaten und der Luftkrieg. Essay und Gespräche*, Frankfurt/Main 2003, ders. (Hg.), Hamburg 1943. *Literarische Zeugnisse zum Feuersturm*, Frankfurt/Main 2003, Dietmar Süß, *Memories of the Air War*, in: *Journal of Contemporary History* 43 (2008), 3, S. 333-342; Jörg Arnold, Dietmar Süß, Malte Thießen (Hg.), *Untergänge und Neuanfänge. Erinnerungen an den Luftkrieg in Europa*, Göttingen 2009. これに対する以前の文献としては: W.G. Sebald, *Luftkrieg und Literatur. Mit einem Essay zu Alfred Andersch*, München/Wien 1999.

⁴ 比較的最近の例としては以下を参照のこと。Oliver Lubrich (Hg.), *Berichte aus der Abwurfzone*, Berlin 2007.

⁵ Margalit, Gilad: *Der Luftangriff auf Dresden. Seine Bedeutung für die Erinnerungspolitik der DDR und für die Herauskristallisierung einer historischen Kriegserinnerung im Westen*, in: Susanne Düwell und Mathias Schmidt (Hg.): *Narrative der Shoah. Repräsentationen der Vergangenheit in Historiographie, Kunst und Politik*, Paderborn u.a. 2002, S. 189-207. Gilad Margalit, *Dresden und die Erinnerungspolitik der DDR*, in: *historicum.net*, URL: http://www.historicum.net/no_cache/persistent/artikel/1787/

- ⁶ Vgl. ISHIDA Yuji, *Overcoming the Past. Postwar Japan and Germany*, in: Han Sang-Jin (Hg.), *Divided Nations and Transitional Justice. What Germany, Japan, and South Korea Can Teach the World*, Boulder 2012, 146-159. 日本の場合、「克服されるべき」過去がどの期間を指すのか——1937から45年までの太平洋戦争なのか、1910年あるいは1895年以降の植民地支配も含まれるのか——が不明確であるが、ドイツの「過去の克服」は1933年から45年の時期に限定されている。
- ⁷ Jörg Arnold, *The Allied Air War and Urban Memory. The Legacy of Strategic Bombing in Germany*, Cambridge 2011; これに関する私の書評は: in: *The Journal of Modern History* Vol. 85, No. 3 (September 2013), pp. 722-723.
- ⁸ Jay Winter, *Sites of memory*, 1995, p. 9.
- ⁹ 日本に関しては以下を参照のこと。ISHIDA Yuji, “Vergangenheitsbewältigung im Vergleich. Faktoren, die Japan und die Bundesrepublik Deutschland unterscheiden, in: *Ferne Gefährten. 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen. Begleitband zur Sonderausstellung*, hrsg. von Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn Museen und dem Verband der Deutsch-Japanischen Gesellschaften, Regensburg S. 262-265, hier: 264.
- ¹⁰ さらなる文献として以下を参照のこと。Jörg Echternkamp, *Soldaten im Nachkrieg. Historische Deutungskonflikte und westdeutsche Demokratisierung 1945-1955*, München 2014. 西ドイツにおける民主化は、日本の場合と異なり、戦前の1920年代の発展や経験の上に、それがワイマール共和国の危機であっても、築くことが可能だった。
- ¹¹ Ulrike Jureit, Christian Schneider, *Gefühlte Opfer. Illusionen der Vergangenheitsbewältigung*, Stuttgart 2010.
- ¹² Jörg Friedrich, *Der Brand. Deutschland im Bombenkrieg 1940-1945*, München 2002. これに関しては以下を参照。Klaus Naumann, *Bombenkrieg - Totaler Krieg - Massaker. Jörg Friedrichs Buch “Der Brand” in der Diskussion*, in: *Mittelweg* 36, 12 (2003) H. 4, S. 40-60; Ralf Blank, Jörg Friedrich; *Der Brand. Deutschland im Bombenkrieg. Eine kritische Auseinandersetzung*, in: *Militärgeschichtliche Zeitschrift* 63 (2004), S. 175-186.
- ¹³ Vergleichen – nicht moralisieren. Hans-Ulrich Wehler über die Bombenkriegsdebatte, in: *Spiegel special „Als Feuer vom Himmel fiel. Der Bombenkrieg gegen die Deutschen“*, 1.4.2003; URL: <http://www.spiegel.de/spiegel/spiegelspecial/d-26766637.html>.
- ¹⁴ Friedrich, *Der Brand*, S. 386.
- ¹⁵ Jörg Friedrich, *Brandstätten. Der Anblick des Bombenkriegs*, München 2003. Vgl. die Rezension von Ralf Blank: Rezension zu: Friedrich, Jörg: *Brandstätten. Der Anblick des Bombenkriegs*. München 2003, in: *H-Soz-Kult*, 22.10.2003, <http://www.hsozkult.de/publicationreview/id/rezbuecher-3483>.
- ¹⁶ Horst Boog, *Der anglo-amerikanische Luftkrieg über Europa und die deutsche Luftverteidigung*, in: *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg*, Bd. 6, Stuttgart 1990, S. 429-560; ders., *Strategischer Luftkrieg in Europa und Reichsluftverteidigung 1943-1944*, in: *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg*, Bd. 7, Stuttgart 2001, S. 3-415. Vgl. auch ders. (Hg.), *Luftkriegführung im Zweiten Weltkrieg. Ein internationaler Vergleich*, Herford 1993.
- ¹⁷ Frederick Taylor, *Dresden, Dienstag, 13. Februar 1945. Militärische Logik oder blanker Terror?* München 2005; A. C. Grayling, *Die toten Städte. Waren die alliierten Bombenangriffe Kriegs-verbrechen?*, München 2007.
- ¹⁸ Baas von Benda-Beckmann: *A German Catastrophe? German Historians and the Allied Bombings, 1945-2010*. Amsterdam University Press, Amsterdam 2010.
- ¹⁹ *Die Zerstörung Dresdens 13. bis 15. Februar 1945. Gutachten und Ergebnisse der Dresdner Historikerkommission zur Ermittlung der Opferzahlen*, Göttingen 2010, URL: https://www.dresden.de/media/pdf/infoblaetter/Historikerkommission_Dresden1945_Abschlussbericht_V1_14a.pdf (1.7.2015).
- ²⁰ Dietmar Süß (Hg.), *Deutschland im Luftkrieg. Geschichte und Erinnerung*, München 2007.
- ²¹ 同書, S. 66. たとえば次の地方研究も参照のこと。Sven Felix Kellerhoff / Wieland Giebel (Hg.), *Als die Tage zu Nächten wurden. Berliner Schicksale im Luftkrieg*, Berlin 2003, Nina Grontzki, Gerd Niewerth, Rolf Potthoff (Hg.), *Als die Steiner Feuer fingen. Der Bombenkrieg im Ruhrgebiet. Erinnerungen*, Essen 2003. In den 1990er Jahren erschienen etwa Wilfried Beer, *Kriegsalltag an der Heimatfront. Alliiertes Luftkrieg und deutsche Gegenmaßnahmen zur Abwehr und Schadensbegrenzung*, dargestellt für den Raum Münster. Bremen 1990, Gerd Ueberschär: *Freiburg im Luftkrieg: 1939 - 1945*, Freiburg i.Br. 1990.
- ²² Nicole Kramer, *Volksgenossinnen an der Heimatfront: Mobilisierung, Verhalten, Erinnerung*, Göttingen 2011, v.a. S. 103-180.
- ²³ Barbara Grimm, *Lynchmorde an alliierten Fliegern im Zweiten Weltkrieg*, in: Dietmar Süß (Hg.), *Deutschland im Luftkrieg*. S. 71-84, 83f. Klaus-Michael Mallmann, „Volksjustiz gegen anglo-amerikanische Mörder.“ *Die Massaker an westalliierten Fliegern und Fallschirmspringern 1944/45*, in: Alfred Gottwaldt, Norbert Kampe, Peter Klein (Hg.), *NS-Gewaltherrschaft. Beiträge zur historischen Forschung und juristischen Aufarbeitung*, Berlin 2005, S. 202-213.
- ²⁴ Malte Thießen, *Eingebrannt ins Gedächtnis. Hamburgs Gedenken an Luftkrieg und Kriegsende 1943 bis 2005*, München 2007.
- ²⁵ Thiessen, *Eingebrannt ins Gedächtnis*, S. 128.
- ²⁶ Vgl. Michael Epkenhans / Carmen Winkel (Hg.), *Die Garnisonkirche Potsdam. Zwischen Mythos und Erinnerung*, Potsdam 2013.
- ²⁷ http://www.hiroshima-platz-potsdam.de/informationen/uh_liste.htm.
- ²⁸ *Symbolisch Hiroshima-Platz benannt*, in: *Potsdamer Neueste Nachrichten*, 25.07.2005.
- ²⁹ Uwe Fröhlich, *Rede zur Mahnwache: Nach Hiroshima und Nagasaki und Fukushima*, 11.02.2012, URL: http://www.bund-brandenburg.de/fileadmin/bundgruppen/lvbrandenburg/Klimaschutz_Energie/Rede_zur_Mahnwache_Fukushima.pdf. (「ポツダム・ヒロシマ広場をつくる会」会長のフレイリヒの挨拶)
- ³⁰ Vgl. Stefan Goebel, *Coventry und Dresden: Transnationale Netzwerke der Erinnerung in den 1950er und 1960er Jahren*, in: Dietmar Süß (Hg.), *Deutschland im Luftkrieg*, S. 111-120.
- ³¹ Jörg Arnold, Dietmar Süß, Malte Thiessen (Hg.), *Luftkrieg: Erinnerungen in Deutschland und Europa*, Göttingen 2009.
- ³² たとえば以下を参照のこと。Norbert Frei, Volkhard Knigge (Hg.), *Verbrechen erinnern. Die Auseinandersetzung mit Holocaust und Völkermord*, München 2002; Carola Sachse, Edgar Wolfrum, Regina Fritz (Hg.), *Nationen und ihre Selbstbilder. Postdiktatorische Gesellschaften in Europa*, Göttingen 2008. Dietmar Süß, *Erinnerungen an den Luftkrieg in Deutschland und Großbritannien* URL: <http://www.bpb.de/geschichte/nationalsozialismus/dossier-nationalsozialismus/39584/erinnerungen-an-den-luftkrieg?p=all>.